

北九州市立大学
文学部紀要

第86号

太宰治のディコンストラクション
—「葉桜と魔笛」における二つの文脈—

河内重雄……………29

北九州市立大学文学部
比較文化学科
2016

太宰治のデイコンストラクシヨン

―「葉桜と魔笛」における二つの文脈―

河内重雄

一 本稿の狙い

太宰治「葉桜と魔笛」〔葦葦〕昭和十四年六月〕は、「老夫人」〔注〕が毎年五月頃になると思い出すという三十五年前の出来事を語る、一人称の小説である。三十五年前の日本海海戦（明治三十八年五月二十七日～二十八日）当時、老夫人は二十歳。母親はすでに他界している。厳格で頑固一徹な中学校長の父親と、腎臓結核に侵され、余命いくばくもない十八歳の妹の面倒をみる必要があることから、結婚の話はあるものの、老夫人はよそへ嫁に行く気が起こらない。以下、老夫人のことは姉と記すが、ある日、妹の筆筒を整理していた姉は、三十通ほどの妹宛の手紙を発見する。手紙のおもてには妹の友人の名が記されているが、手紙の中には全てM・Tという男の名が記されている。手紙によると、妹とM・Tの関係は「心だけのものではな」く、「醜くすすん」だもので、去年の秋、M・Tは妹の病気を知るとともに、妹を捨てる内容の手紙を妹に送り、それ以来、一通の手紙も寄

越していない。この事実を人に語らなければ、妹は「きれいな少女のまま死んでゆける」のだから、苦しさを自分の胸一つにおさめて生きていこうと思うものの、妹のことを可哀想に思う姉は、M・Tの筆跡をまねて妹宛の恋文を書く。手紙を読んだ妹は、手紙は姉の書いたものと見抜き、三十通もの手紙は全て自分に宛てて自分で書いたものと告白。自分は男の人と話したことすらない、自分たち姉妹はもっと青春を大事にし、男の人と大胆に遊べばよかったのだと妹は姉に語る。その三日後、妹は安らかに息を引き取る。葉桜の頃になると思い出すという姉の思い出は、妹とのやり取りが中心と言ってよいだろう。

拙稿のタイトルは「太宰治のデイコンストラクシヨン」。これは、花田俊典氏の論文「坂口安吾のデイコンストラクシヨン」〔注〕を意識してのものである。しかしながら、デイコンストラクシヨンのニュアンスは異なる。花田氏の場合は、皇国史観などの既成の物語（ライクシヨン）のもつ本当らしさに対抗するのにも、歴史的事実（ノンフィクション）をもつてくるのではなく、

別の本当らしい物語（フィクション）を作り出してぶつけることを
 デイコンストラクションとしている。拙稿におけるデイコンス
 トラクションという言葉は、廣野由美子『批評理論入門』^(注3)
 の言うような意味に近い。

「脱構築批評」は、現代の批評理論のなかでもっとも
 難解なものだという定評がある。しかし、ある明快な作品
 解釈に出会ったとき、それに説得される一方で、「本当だ
 ろうか？」という疑問の声が生じてくる経験は、だれにで
 もあるだろう。それとは衝突する別の解釈の可能性がある
 ような気がしてくるのだ。こういうとき、私たちは衝動的
 にテキストを脱構築しようとしていると言える。脱構築批
 評とは、テキストが互いに矛盾した読み方を許すものであ
 ること、言い換えるなら、テキストとは論理的に統一され
 たものではなく、不一致や矛盾を含んだものだということ
 を、明らかにするための批評である。アメリカの代表的な
 脱構築批評家J・ヒリス・ミラーは、「脱構築とは、テク
 ストの構造を分解することではなく、テキストがすでに自
 らを分解していることを証明することだ」と説明している。
 つまり、従来の解釈を否定して別の正しい解釈を示すので
 はなく、テキストが矛盾した解釈を両立させていることを
 明らかにするのが、脱構築批評の目的なのである。

一つの小説で、相反する解釈が同時に成り立つことを示すと
 いう脱構築批評＝デイコンストラクション。矛盾する読みが両
 立してしまうのは、作者が意図する・しないに関わらずのこと
 だが、「葉桜と魔笛」(以下、本作とする)の場合は、意図的に両立
 するよう書かれているように思われる。掲載雑誌の狙い・目的
 に合わせるふりをしながら、こっそり掲載誌を裏切るような
 メッセージもくみ取れるよう工夫していると思われるのだ。本
 稿では、意図的に相反する解釈が可能な書き方をしていること
 を、太宰治のデイコンストラクションとしたい。

本作が矛盾するメッセージを同時に発するのは、妹の男性関
 係に関する箇所においてである。以下、妹の告白等に注目しつ
 つ、本作からどのようなメッセージを読み取ることができると
 を検討する。

二 妹の性体験の有無及び告白の真偽について

本作において読者が想像力を発揮できる点の一つは、妹はM・
 Tと性的な関係をもったか否かという点である。言い換えると、
 妹は「きれいな少女」＝処女のまま死んだか否かという空白を
 埋める自由が、読者には与えられている。無論、分らないとい
 うことに積極的に意味を求めようような読み方もあり得よう。
 本稿では、妹は関係をもったとするか、しないかで、くみ取れ
 るメッセージが逆のものとなることに注目する。デイコンスト

ラクシオンはこの点においてなされている。

妹宛の三十通ほどの手紙を読み、妹とM・Tの関係を知った姉は、妹を可哀想に思い、「M・Tの筆蹟を真似て」妹に宛てた恋文を書く。その恋文を読んだ妹は、恋文は姉が書いたものであり、姉が恋文を書いた理由はM・Tからの手紙を姉が読んだからだと悟る。そして妹は姉に、M・Tからの手紙は全て自分で自分に書いたものと告白する。

「姉さん、あたし知つてゐるのよ。」妹は、澄んだ声でさう眩き、「ありがたう、姉さん、これ、姉さんが書いたのね。」

私は、あまりの恥づかしさに、その手紙、千々に引き裂いて、自分の髪をくしやくしや引き筆つてしまひたく思ひました。(略)私が書いたのだ。妹の苦しみを見かねて、私
が、これから毎日M・Tの筆蹟を真似て、妹の死ぬる日まで、手紙を書き、下手な和歌を、苦心してつくり、それから晩六時には、こつそり扉の外へ出て、口笛吹かうと思つてゐたのです。(略)

「姉さん、心配なさらなくても、いいのよ。」妹は、不思議に落ちついて、崇高なくらゐに美しく微笑してゐました。

「姉さん、あの緑のリボンで結んであつた手紙を見たのでせう? あれは、ウソ。あたし、あんまり淋しいから、をととの秋から、ひとりであんな手紙書いて、あたしに宛てて投函してゐたの。姉さん、ばかにしないでね。青春と

いふものは、ずるぶん大事なもののよ。あたし、病氣になつてから、それが、はつきりわかつて来たの。ひとりで、自分あての手紙なんか書いてるなんて、汚い。あさましい。ばかだ。あたしは、ほんたうに男のかたと、大胆に遊べば、よかつた。あたしのからだを、しつかり抱いてもらひたかつた。姉さん、あたしは今までいぢども、恋人どころか、よその男のかたと話してみたこともなかつた。姉さんだつて、さうなのね。姉さん、あたしたち間違つてゐた。お利巧すぎた。ああ、死ぬなんて、いやだ。あたしの手が、指先が、髪が、可哀そう。死ぬなんて、いやだ。いやだ。」

私は、かなしいやら、こはいやら、うれしいやら、はづかしいやら、胸が一ぱいになり、わからなくなつてしまひまして、妹の瘦せた頬に、私の頬をびつたり押しつけ、ただもう涙が出て来て、そつと妹を抱いてあげました。

M・Tからの三十通もの手紙は全て自分で書いたものだという妹の告白は、一見真実の告白のように思われる。しかしながら、妹の告白が真実であるという証拠は、実のところ何一つない。真実であるかどうかは、まず第一に、妹の告白を信じるかどうかにかかっている。だとすれば、この妹の告白は、姉への思いやりからついた嘘であるとする解釈も、可能ではあるまいか。手紙は全て実在するM・Tからのもので、妹たちの関係も手紙にある通りのものであり、妹は姉に対する感謝と愛情から、

手紙は全て自作自演のものだと嘘の告白をしたのではないか。

妹が嘘の告白をしたと考えられる根拠も、無い訳ではない。本作の姉は十三歳の時に母を亡くして以降、母親の代わりとして父と妹の面倒をみている。母親の代わりをつとめてきた姉が、三十通もの手紙を読んだ時に、それらが妹の「筆蹟」かどうか分からないというのは、いささか不自然ではあるまいか。実際、姉は三十通の手紙について、これは妹の筆蹟かもしれないと疑ってはいないようだ。この妹には、姉に自らの告白を信じさせることができる程度に、男性的な筆蹟で書く力があるのであるうか。

また、三十通もの手紙が全て自作自演のものだったとすれば、そのような手紙を「去年の秋」から大事に一年近く保管しておくだろうか。淋しさを紛らわせるための自作の手紙であるなら、去年の秋の時点で焼き捨ててもよかつたのではないか。緑のリボンで結んで筆筒の奥底に隠していたのは、辛くとも忘れられない思い出の品だったからと考えることもできよう。

加えて、姉が妹の告白を真実と思ったといった記述も特に見当たらない。妹の告白を信じたのであれば、姉の語りは、「私たちの恋愛は、心だけのものではなかつたのです。もつと醜くすすんでゐたのでございます。」といった断定的なものではなく、「あとでそれは間違いだったと分かつたのですが」などと付け加えるような語りでもよかつたのではないか。妹の告白を聞いた姉は、「かなしいやら、こはいやら、うれしいやら、は

づかしいやら、胸が一ぱいにな」つたという。嬉しいのは、自分のことを心配して妹が嘘をついてくれたと思つたからだとして、解釈することも可能であろう。妹は告白の時、「崇高なくらゐに美しく微笑してゐ」る。姉のことを思いやつて嘘をついたからこそその崇高さと、考えることもできよう。前述の筆蹟の件もそうだが、姉は妹の告白を信じていないとも解釈できる。

以上、決定的な物的証拠とは言えないが、妹の告白は姉を氣遣つての嘘だと解釈できる根拠を述べた。妹の性体験の有無という空白を有つたという形で埋め、姉は妹の告白を信じていないとするのも、あながち穿ち過ぎではあるまい。

この姉は母親代わりに一家を支えてきたことから、「妹たちの恋愛は(略)醜くすすんでゐた」という姉の推測が当たつているとすれば、他の姉の推測も大体において当たつていのではないかと考えることもできよう。例えば、小説ラストの軍艦マーチの口笛を吹いたのは誰かという空白。これも、姉の予想通り、父親が吹いたと考えることは可能であろう。彼女たちが当時住んでいたのは、小説の最初の段落にあるように、町はずれにぼつんと一つ離れて建っている寺の、そのまた離れである。誰かが偶然口笛を吹きながら通ることはまずあり得ないし、寺の人が話を聞いて口笛を拭いてあげたとも考えにくい。また、神隠しなどが起きたりする山の中ではなく、「山に近いところ」に寺が建つているといふ設定からも、神秘的な現象と解するよりは、リアルな現象と解する方が自然だと言えよう。とすれば、

三人家族の残りの父親が吹いたと考えるのが妥当ということになる。

ともあれ、M・Tは実在し、妹には性体験があったという形で空白を埋めると、小説全体からどのようなことが読み取れるであろうか。次章ではそのことについて述べる。

三 男性と積極的に遊ぶようすすめる文脈

妹がM・Tと関係をもったとすれば、そして姉が妹の告白を嘘だと思っているとすれば、問題になるのは次の一節である。

私も、まだそのころは二十になつたばかりで、若い女としての口には言へぬ苦しみも、いろいろあつたのでございます。三十通あまりの、その手紙を、まるで谷川が流れ走るやうな感じで、ぐんぐん読んでいつて、去年の秋の、最後の一通の手紙を、読みかけて、思はず立ちあがつてしまひました。(略) 妹たちの恋愛は、心だけのものではなかつたのです。もつと醜くすすんでゐたのでございます。私は、手紙を焼きました。一通のこらず焼きました。M・Tは、その城下まちに住む、まづしい歌人の様子で、卑怯なことには、妹の病気を知るとともに、妹を捨て、もうお互ひ忘れてしまひませう、など残酷なこと平気でその手紙にも書いてあり、それつきり、一通の手紙も寄こさないらしい具

合でございましたから、これは、私さへ黙つて一生ひとに語らなければ、妹は、きれいな少女のまままで死んでゆける。誰も、ごぞんじ無いのだ、と私は苦しさを胸一つにをさめて、けれども、その事実を知つてしまつてからは、なほのこと妹が可哀さうで、いろいろ奇怪な空想も浮んで、私自身、胸がうづくやうな、甘酸っぱい、それは、いやな切ない思ひで、あのやうな苦しきは、年ごろの女のひとでなければ、わからない、生地獄でございます。

自分さえ黙っていれば妹は「きれいな少女のまままで死んでゆける」と姉は語っている。しかし、そう思うのであれば、なぜ「妹たちの恋愛は(略)醜くすすんでゐた」などと語るのか。妹の告白が真実であれば、この矛盾にはならない。妹の告白が真実の場合は、単に妹は「きれいな少女のまままで死んで」いったということになる。しかし、姉が妹の告白を嘘だと思つている場合は、この二つの語りは明らかに矛盾する。繰り返しになるが、姉は「妹たちの恋愛は(略)醜くすすんでゐた」ことを最後まで否定していない。

この矛盾を解消する一つの解釈は、次のようなものであろう。すなわち、妹の「あたしは、ほんたうに男のかたと、大胆に遊べば、よかつた。(略)姉さん、あたしたち間違つてゐた。お利巧すぎた。」という言葉は姉は受け入れた、という解釈である。姉は妹の言葉に接し、「きれいな少女のまままで死」ぬよりも、

男性と大胆に遊ぶ方がよいと考えるようになったのではあるまいか。処女でいることよりも、男性と関係をもつことを積極的に肯定するようになった、と。

このように解釈すれば、姉が妹の性的な体験について「黙つて」いなかったことも理解できる。妹の性体験について沈黙を破ったのは、私の妹は死ぬ前に大胆に男の人と遊んだのですよ、素晴らしいでしょう、といったことを意味している。この場合、「醜くすすんでゐた」と否定的なニュアンスで語られているのは、妹の言葉を受け入れる前の時点では醜いと感じたからと考えられよう。

妹の一件があつた頃、姉は「二十になつたばかりで、若い女としての口には言へぬ苦しみも、いろいろあつた」という。その苦しみが恋愛に関するもの、例えば両想いの相手がいたが、家庭故に我慢していたといったものだったとすれば、二十四歳で結婚するまでの空白の時間に何があつたと想像されるであろうか。妹の思いやりに満ちた言葉に接し、価値観が変わり、男性と積極的に遊んだという想像も、可能ではあるまいか。小説の最後、「物慾」という言葉が二度出てくるが、「信仰」に対し「物慾」を強調するといふのも、精神的愛から肉欲への価値観の変化を示唆してはいないだろうか。

当時の恋愛・結婚については、小泉和子編『昭和の結婚』^(注4)が次のように述べている。いずれも「第3節 認められない恋愛結婚」からの引用。

大正時代の中頃から、自由恋愛こそ人間の自然な姿だと説く人々が現れてはいたが、受け入れたのは一部の知識層に限られた。また、そうした人々も恋愛結婚を理想としながらも、現実にはほとんどが見合い結婚をしていた。一般の人々にとって恋愛結婚は親不孝者のものであった。自由恋愛を謳歌し、恋愛結婚をするのは、失うものを持たない下層の人々か、人道主義や自由意志を標榜し時代の先端をゆく一部の者にすぎなかった。

また、当時の「恋愛結婚」の多くは男性主導の恋愛で、見初められた女性がそれに応じ、清く正しい（不純異性交遊ではない^{みそ}）性的関係を伴わない^{みそ}交際を経て、結ばれるべきものだった。

女性から愛を打ち明けるのははしたないことであり、交際が始まって「結婚を前提」にした、きちんとしたおつきあい^{みそ}であることが求められ、結婚するまでは、たとえ婚約者だろうと決して、肌身を許してはいけないとされていた。

結婚前にもかかわらず求められるまま、処女を捧げてしまつと、「キズものにされた」といわれた時代である。燃えるような恋をして身も心も捧げたものの、結果的に相手と結婚することができず、人生をはかなんで自ら命を絶つような悲劇もあつた。親たちは娘が年頃になると、「悪

い虫がつく前に（恋愛沙汰になる前に）」と、見合いを勧め、娘たちも適齢期になると、持ち込まれる縁談を心待ちにしていたのである。

〔「見合い結婚」から「恋愛結婚」へ〕

結婚適齢期を迎えた娘たちのもとには、ちらほらと縁談が舞い込む。昭和になると、家族を養うために働かなくてはならないといったよほどの事情がないかぎり、中流家庭に生まれ育った娘の多くは女学校に進学し、卒業後は良縁を得て結婚するのが当たり前だった。（略）

恋愛感情よりも家と家の結びつきに重点がおかれた時代、好きな人と結ばれる幸運などほとんどない。恋は「はしかにかかったような」ものであり、本人の感情よりも、家長の意向や世間との義理が優先されたからである。淡い恋心を抱いても心の奥に封印し、親の決めた縁談にしたがわなくてはならなかった。

愛だの恋だのという以前に、親に背いて自分を通すこと自体がとんでもないこと、許されないことだったのである。

〔恋愛するのは親不孝者〕

結婚を前提に、ししかるべき、人を立てて、親に、交際を申し込むという手順を踏まず、直接娘に声をかけたり、恋文を送ってきたりするような異性は不良青年であり、それに軽々しく応じるような娘は「蓮はす葉は」な不良娘と後ろ指

をさされた。もちろん娘のほうから好意をもった相手に交際を申し込むようなはしたない真似はできない。慎ましく相手から望まれる縁を待つしかなかった。

〔見る目ない恋愛は「貞操の危機」〕

親、特に父親の許しを得ない当人同士の自由恋愛はよろしくない、交際するにしても「清く正しく」つきあうべきだとする考えが主流だった、とまとめられよう。姉は妹宛の手紙を見つけた時、「あの厳格な父に知れたら、どんなことになるだらう、と身震ひするほどおそろしく」感じたという。おそらく父親の考えは、当時主流だった考え方とかわらないと思われる。しかしだからこそ、口笛を吹いたのが父親だった場合、読者（知識人）のうける感銘は大きくなると言えよう。

厳格な父に育てられた姉が妹の言葉を受け入れ、結婚をひかえた女性が男性と積極的に遊ぶことを肯定するというのは、当時の恋愛観からすれば、衝撃的なことに違いあるまい。妹に性体験があった場合に読みとれるのは、結婚適齢期の女性に積極的に男性と関係をもつようすすめる、つまり「不良娘」になることをすすめるといったメッセージと言えよう。

四 掲載雑誌に協力しつつ裏切る書き方

本作が掲載された雑誌『若草』だが、これはどのような性格

の雑誌か。一言で言うと、中流家庭の女学生など若い女性を読者として想定した、教養を高めるための文芸雑誌である。以下は日本近代文学館編『日本近代文学大事典』^(註)からの引用。

「若草」文芸雑誌。大正一四・一〇～昭和二五・二。編集藤村耕一、のち田辺耕一郎、北村秀雄、福田信夫ら。東京日本橋区本銀町三丁目一四番地、宝文館発行。はじめは、同じ発行所から発行していた「令女界」の姉妹誌として、単なる若い女性向き雑誌として発行していたが、創刊翌年から雑誌協会から文芸部門の雑誌として扱われた。表紙絵は竹久夢二、のち佐野繁次郎、東郷青児ら。文壇に新しい潮流が起ることにそれらの新人を執筆者に迎え、太宰治のはじめての連載小説『乞食学生』（昭一五・七～二二）、田中英光の『鍋鶴』（昭一四・四）などを載せた。おもな執筆者は、当初南部修太郎、橋爪健、北川千代、井上康文、城しづか、八木重吉らほか、中条百合子、吉屋信子、佐藤春夫、川端康成、田山花袋、小島政二郎、片岡鉄兵らの多彩な顔ぶれであった。「若き女性の雑記帳」を標榜して、読者から文芸作品の懸賞募集を行い、無名の人の投稿作品の掲載によって、それらの人々を鼓舞し、文壇に新風を送る機関ともなった。いわゆる少女小説の流行に寄与するところが大きかった。

『若草』に掲載された太宰作品は、「乞食学生」以外にも「雌に就いて」（昭和十一年五月）、「喝采」（昭和十二年十月）、「燈籠」（昭和十二年十月）、「誰も知らぬ」（昭和十五年四月）などがある。『令女界』の姉妹誌ということだが、『令女界』については以下の通り。

「令女界」文芸雑誌、投書雑誌。大正一一・四～昭和二五・九。八巻九号（昭一九・五～二二・三休刊）まで。宝文館発行。研秀社発行の幼年雑誌「檉の実」を母体とし純然たる少女雑誌を目ざして創刊された。編集者は竹原久之助、実質的な編集の中心は藤村耕一（白光）。創刊時定価は三〇銭。各号一五〇ページ前後。事務所ははじめ東京市日本橋区本石町にあったが、大正一三年四月、同市外森に移転。内容はほとんどが少女小説、少女詩であったが、一三年ごろより詩、短編とだけ銘打つものが多くなった。これは内容的進歩と捉えるにはいたらないが、本誌の対象とする読者層のおのずからなる変化を示している。すなわち、創刊時には広く少女向けであったのがしだいに限定され女学校上級生を対象とし、いわゆる少女雑誌と婦人雑誌の中間に介在するようになったのである。全巻を通しての執筆者に荒江啓、加藤まさお、山田みのる（漫画）、落谷虹児（口絵）があり、吉屋信子（『離れ鳥』）、西条八十、北原白秋らも佳品を発表。さらには室生犀星（『卓上小園』）、田山花袋（『父親』）、与謝野晶子、岡本かの子、南部修太

郎らが寄稿。これら一級の作家を迎え、また編集に北村秀雄が加わるにおよんだ一四年にはその全盛時を迎えた。「令女髪」「令女履」の新語を生んだのはこのちのことである。本誌の特色は読者層の限定、一流作家の参加と、いま一つあげるべきことは、竹久夢二、岩田専太郎ら一流の画家を擁し、口絵も一作品として小説と同列に扱い、美しい雑誌を目ざしてその成果をあげたことである。再刊後は花村燮を中心とし、投書欄が縮小され、もっぱら小説読物に力を入れ、大林清『花譜』、柴田錬三郎『憂愁夫人』、武者小路実篤『或日の午前』、北町一郎『姉弟』、および福田清人の伝記小説などを掲載。大正後期から昭和にかけて、若い女性の心の糧としての役割は大きかった。別働隊に「若草」令女がある。

掲載雑誌の読者―結婚をひかえた育ちのいい女性たち―に、あからさまに男性と関係をもつようすすめる訳にはいかない。注意深く読めばそのようなメッセージは読み取れるにしても、少なくとも表面上は、男性と大胆に遊ぶことを戒めているように見える必要がある。

本作はこれまで、妹は「きれいな少女」＝処女のまま死んだとして一般に読まれてきた。妹の告白をそのまま信じればその通りである。筆跡に関しては、管見では問題とされたことはない。無論、問題にしなければならぬという訳でもなく、問題

にするにしても、例えば姉は妹ほど「できる」人物ではなかったため、妹の筆跡にまで注意が向かなかったなどと考えれば、姉は妹の告白を信じた、妹は処女のまま死んだと解することも可能であろう。一年近く手紙を箆筒に隠していたことについても、単に捨てに行く機会がないまま入れっぱなしにしていたのではないか、などと考えれば、やはり妹の告白を疑う必要はないと言える。

妹は処女のまま亡くなったとする解釈を、姉の「妹たちの恋愛は、心だけのものではなかったのです。もつと醜くすんでゐたのでございます。(略)私さへ黙つて一生ひとに語らなければ、妹は、きれいな少女のまままで死んでゆける。」という台詞とつなげれば、本作には処女であること、貞操を価値化するメッセージがあると言える。日中戦争が始まって約二年、本作掲載誌が求めるのはこのようなメッセージであろう。

念のためここで一つ確認しておきたいのは、本作の語り手はどのような人物か、ということである。以下は本作冒頭の一文。

桜が散つて、このやうに葉桜のころになれば、私は、きつと思ひ出します。―と、その老夫人は物語る。(略)

本稿の最初の作品梗概では、煩雑になるのを避けるべくあえて触れなかったが、本作には、「その老夫人」の「物語る」の聞き、おそらくはその話を引用する形で読者に語っている語

り手が存在する。このもう一人の語り手を垣間見ることができ
るのはここだけで、この語り手については、「老夫人」がこの
ような話をして不自然ではないような相手ということ以外、
不明である。

姉が信仰について語っていることから、神父などをこの語り
手に考えることも可能であろう。その場合、読者としては貞操
をよしとするようなメッセージをくみ取るのが妥当と言えよ
う。時局や掲載雑誌の性格とも齟齬はきたさない。

作者・太宰らしき人物をこの語り手に考えることも可能であ
る。この場合、処女性を貴ぶようなメッセージを発しつつ、同
時に真逆のメッセージもくみ取れるよう仕掛けを施している、
と考えることができるのではあるまいか。本稿で言うディコン
ストラクションとは異なるが、例えば松本常彦氏は「テキスト
の毒・太宰治「津軽」の政治学」^(註6)で、次のように指摘して
いる。

たとえば「国防上」表現することが禁止もしくは躊躇さ
れる対象に配慮する方法として、それに一言半句も費やさ
ずやりすぎすことと、「津軽」のように「国防上」表現で
きないという表現を六度も繰り返すことと、いずれが、「国
防上」有効かは問うまでもなく、戦時下の表現者が、それ
に気づかなかつたはずもない。「国防上」表現できないと
言い募ることは、ほぼ不可避免的に、いやでも「国防上」重

要な地点へと人を誘導してしまふ。したがって、その表現
は「形式的あるいは儀礼的な辞句」などではなく、まして
や現実の「国防」に対する配慮などではない。

国防に対し一見配慮しているようで、事実は逆の書き方。「津
軽」の場合は悪意は見え透いている。しかし、本作の場合は、
筆跡のことに注目するなど、細かな点に注意して読んでいかな
ければ悪意は伝わらない。伝わる人には伝わる書き方であり、
それは「津軽」等の作者・太宰らしい語りではあるまいか。

薄幸の美少女が処女のまま一生を終える、時局や掲載誌の求
める処女賛美の文脈を用意しつつ、同時にその文脈の解体構築
(ディコンストラクション)も行ふ。本作は処女性や貞操観念を価値
化しつつ攻撃している、掲載誌に協力しつつ反抗している作品
と考える。

【注記】

1 以下、「葉校と魔笛」本文の引用は『太宰治全集 第二巻』（昭和
四十六年四月 筑摩書房）による。なお、本稿における引用文中
の傍線は全て筆者により、旧漢字は新漢字に改め、ルビは適宜省
略した。

2 『坂口安吾生成』（平成十七年六月 白地社）収録。

3 平成十七年三月、中央公論新社。

4 平成二十六年十一月、河出書房新社。

太宰治のディコンストラクション
— 「葉桜と魔笛」における二つの文脈—

5 昭和五十二年十一月、講談社。
6 『敍説』(平成十年八月)。

JOURNAL
OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
No. 86 September 2016

Deconstruction of Osamu Dazai

— two contexts in “cherry tree in leaf and The Magic Flute”

Shigeo KOUCHI29

The Department of Comparative Culture
The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
2016